

早稲田大学を創立した  
大隈重信の授爵について



水稲荷神社 大隈重信が足繁く通ったという北野神社

― 目 次 ―

はじめに 3

〈1〉大隈重信について 5

〈2〉爵位制度について 21

〈3〉叙位条例について 35

〈4〉当時の新聞報道について 39

〈5〉宮内公文書館訪問調査 46

〈6〉国立公文書館訪問調査 50

〈7〉大隈重信墓誌について 53

〈8〉インターネットでの掲載について 56

〈9〉応援歌『紺碧の空』の解釈 67

結論 70

主な参考文献 73

あとがき 75

## はじめに

一九二二（大正十一）年一月十日午前七時、大隈重信は胆石症のため早稲田の自邸で息を引き取った。享年八十三歳であった。

一月十七日の私邸での告別式ののち、日比谷公園を会場にかつてない規模での「国民葬」が催され、約三十万人にも及ぶ民衆が参列して大隈との別れを惜しんだ。この三週間後には同じく日比谷公園で山縣有朋元首相の「国葬」が催されたのだが、こちらのほうは政府関係者以外は人影もまばらで、翌日の東京日日新聞は「大隈候は国民葬。昨日は〈民〉抜き、〈国葬〉で幄舎の中はガランドウの寂しさ」と報じた。斎場の幄舎は二棟建てられ「一万の参列者を入れる為」の規模であったが、実際には「二棟で一千にも満たず雨に濡れた浄白な腰掛はガラ空き」という状態であったという。元帥陸軍大將従一位大勲位功一級公爵たる偉人山縣をおとしめるわけ

では毛頭ないが、大隈の人となりや人徳をしのばせる余話といえるかもしれない。

逝去後、大隈は明治維新の元勳としての功績を讃えられて、特旨をもって「従一位」に陞叙、「菊花章頸飾」章を授かった（官報二八三〇号大正十一年一月十日付叙任及び辞令）。ただ、合点がいかないのは、大隈の爵位についてである。早稲田大学や他大学において、あるいは爵位事典などにおいて、大隈の陞爵についていくつかの研究がなされているが、いずれも「牧野宮相が廃案にした」とか「握り潰された」とか「文書が捨てられた」とか、同じ参考文献や想像に頼る面の多い議論ばかりであり、どうも信用に欠けるものが多い点はいかんともしがたい。

そこで、まず、大隈重信について紹介し、次に爵位制度や叙位条例について研究し、一九二二（大正十一）年一月十一日から十二日にかけての大手各社の新聞記事を再度精査するとともに、宮内庁書陵部公文書館と国立公文書館を訪問して聞き取り調査を行ない、さらにインターネットからの各種情報と照らし合わせながら、その実態を探ることにした次第である。また、早稲田大学の応援歌『紺碧の空』についてもその歌詞を検証した。

## 〈1〉大隈重信について

大隈重信は、江戸期の武士（佐賀藩士）から、明治・大正期に政治家として活躍。貴族院議員、参議兼大蔵卿、外務大臣（第三・四・十・十三・二十八代）、農商務大臣（第十一代）、内務大臣（第三十・三十二代）などを歴任し、内閣総理大臣（第八・十七代）も務めた。教育者としても知られ、早稲田大学の創設者であり、初代総長でもある。

一八三八（天保九）年、佐賀城下会所小路（現・佐賀市水ヶ江）に、佐賀藩士の大隈信保・三井子夫妻の長男として生まれる。幼名は八太郎。大隈家は知行（幕府や藩が家臣に俸禄として支給した土地や俸禄）三百石を食み、石火矢頭人（砲術長）を務める上士（家格の高い武士）の家柄であった。また、その祖先は、大宰府天満宮菅原道真という。

藩主鍋島直正が一七八九（寛政元）年に創設した藩校弘道館に入学。しかし、佐賀の特色である『葉隠』にもとづく儒教や朱子学の教育に不満を持ち、反撥を強め、同志とともに藩校改革を訴えたものの、一八五五（安政二）年に退学処分を受けてしまう。

この頃、藩校弘道館の教諭であった枝吉神陽から国学を学び、感化される。思想家であり佐賀の尊皇派の中心的存在でもあった枝吉は、早くから儒教や朱子学の教えに疑問を抱いており、佐賀藩の哲学である『葉隠』をも否定したといわれる。勤王運動を行なうかたわら、一八五〇（嘉永三）年には「義祭同盟」を結成。天皇を中心とした政治体制である律令制などの知識を生徒たちに伝授し、藩論を尊王倒幕に向かわせようとしたが、藩主を動かすことはできず失敗している。

この尊皇派の「義祭同盟」に枝吉の実弟副島種臣や江藤新平、大木喬任、島義勇、副島種臣らとともに大隈も参画。後年大隈自身が「枝吉神陽先生から学んだことが私の一生の精神行為を養成した第一歩であった」と述べている。「義祭同盟」は大隈をはじめ明治維新に大きな影響を与えた人材を多数輩出しており、このことから枝

吉神陽は、佐賀の吉田松陰とも称される。

一八五六（安政三）年、大隈は佐賀藩が開いた医療学校である蘭学寮に転じた。長崎に隣接する佐賀藩での蘭学の導入は医学から始まり、ここがオランダ語など蘭学研究の中核となる教育機関だったのである。蘭学寮ではアメリカ独立宣言を起草したトーマス・ジェファースンの影響を強く受けるとともに、新約聖書や西欧の学問に接したのを機に、長崎英語伝習所に出て英学を学んだ。ここでオランダ人宣教師グイド・ヘルマン・フルベッキに会い、英語を学ぶとともに、世界への眼を開かれ、政治家になることを決心する。

この頃、公武合体論（朝廷と公の伝統的権威と幕府及び諸藩と武を結びつけて幕藩体制の再編強化を図ろうとした政策論）や尊皇攘夷を拠り所にして政局をリードする存在になっていた長州藩では、吉田松陰の私塾「松下村塾」で学んだ多くの藩士がさまざまな分野で活躍し、のちの倒幕運動につながっていく。また、攘夷決行のため下関海峡と通る外国船を次々と砲撃した結果、長州藩は欧米諸国から敵と見なされ、一八六三（文久三）年五月と一八六四（元治元）年七月の二回にわたって

英・仏・蘭・米の列強四国との間に下関戦争が起こった。しかし、長州藩はこの戦争に負けて、賠償金を支払うこととなる。

大隈は一八六一（文久元）年に藩主鍋島直正にオランダの憲法について進講しているが、その縁もあってか、下関戦争の際には長州藩援助を企て、江戸幕府との調停の斡旋を含む長州藩への協力を説いたが、藩政に影響するには至らなかった。また、翌年の長州征討では、藩主鍋島直正をかついで朝幕間に斡旋しようとしたが、これも失敗。

このあと、大隈は蘭学寮を併合した弘道館の教授に着任し、蘭学を講じる。そして、一八六五（慶応元）年、佐賀藩が長崎の五島町にあった諫早藩土山本家屋敷を改造した佐賀藩校英学塾「致遠館」（校長はフルベッキだった）で、副島種臣とともに教頭格となつて指導に当たることになる。

なお、出石藩出身の加藤弘之も済美館や致遠館でフルベッキの門弟として学んでいる。兵庫県知事の服部一三は、大隈重信の致遠館で岩倉具視の子である具定・具経兄弟とともに大隈やフルベッキから教えを受けた。また、中島永元は教員として



指導にあたり、西郷隆盛・従道や森有礼、折田彦一等も致遠館で学生として学んでいる。佐賀藩士湯原元一も幼少期、佐賀藩藩校で学び、のち、それを改造した佐賀藩校弘道館の流れを汲む勸興小学校で学んだ。

その一方で、京都や長崎にたびたび往来して、尊王派としての活動を続けた。一八六七（慶応三）年には、副島と謀って將軍徳川慶喜に大政奉還を勧告しようとして脱藩、京都へ向かったが、捕えられて佐賀に送還され、一か月の謹慎処分を受けた。

明治維新に際しては、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、岩倉具視らとともに「維新の十傑」の一人に数えられる小松清廉の推挙により、一八六八（明治元）年三月明治新政府参与職、外国事務局判事として長崎に勤務。キリスト教禁令に伴う浦上信徒弾圧事件の際には、駐日英国公使ハリー・スミス・パークスと交渉し、手腕を発揮する。

このときパークスは「日本が行なっているのは野蛮国の所業であり、今すぐ信者を解放し、信教の自由を認めよ」と抗議してきた。その対応に手をこまねいていた

明治政府は、英語が話せてキリスト教の知識もあつた大隈を選び交渉役として派遣したわけである。しかし当時大隈は弱冠三十一歳。パークスは「身分の低い小役人とは話ではできぬ！」と激怒したという。しかし大隈は「一国の代表者である私と話したくないと言うのなら、抗議は全面撤回とみなす。また、あなたの言うことは、国際法で禁止されている内政干渉である」と言い返し、互角にわたりあつた。パークスは極東の小さな島国の若者の口から「国際法」「内政干渉」などという単語が発せられたことに驚いたという。さらに大隈は「今の日本でいきなりキリスト教を開放すれば混乱が起きる」とパークスを説得。この手腕が大きく評価されて、政界の中樞へ躍り出る契機となる。

一八六九（明治二）年からは会計官（のちの大蔵省）副知事を兼務し、新貨条例の制定などの金融行政にも携わつた。とりわけ、一八六九（明治二）年七月に東京高輪において開催された明治政府首脳とイギリス・フランス・アメリカ・イタリア・ドイツの五か国の駐日公使による会談、いわゆる高輪談判における大隈の交渉・調停能力は高く評価され、これを機に日本は官民の贖貨の回収と近代貨幣制度の導入